



Title	自閉スペクトラム症の感覚処理傾向と発話聴き取りの特徴について [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	柳, 民秀
Citation	北海道大学. 博士(教育学) 甲第15803号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92373
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	RYU_Minsu_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：柳 民秀

学位論文題名

自閉スペクトラム症の感覚処理傾向と発話聴き取りの特徴について

自閉スペクトラム症（ASD）は発話聴き取りに困難を示すことが知られている（Järvinen-Pasley et al., 2008）。また、ASDは音高知覚に優れ（Heaton, 2005；Motttron, Peretz, & Menard, 2000）、間隔変化を検知することを含む時間知覚に困難を示すことが知られている（Fos-Feig et al., 2017）。本研究は、ASD特性や感覚処理傾向が発話聴き取りの際の物理的情報の知覚や、発話認知・理解の特徴にどのような関連がみられるかを明らかにすることを目的とした。

本研究では、研究1において、自閉症スペクトラム指数（AQ）で測定したASD特性と、青年成人感覚プロファイル（AASP）で測定した感覚処理傾向との関連を調べた。ASD診断を受けた診断群とAQ高群、AQ低群の3群で比較した結果、診断群とAQ高群がAQ低群に比べ感覚処理傾向の非定型性が強いことが示された。また、診断を受けているかどうかにかかわらずAQの下位尺度である「細部への注意」がかかっている可能性が示唆された。研究2において、発話における音高変化検知と間隔変化検知の成績をASD群と非ASDで比較した。また、音高変化検知・間隔変化検知の成績と、AQ、AASPの関連を調べた。その結果、音高変化検知と間隔変化検知の成績はASD群と非ASD群に差は見られなかった。また、非ASD群は日本語において意味処理との関連が強い間隔変化検知を優先する傾向がある一方で、ASD群にそのような傾向が見られないことが示された。さらに、間隔変化検知に、AASPにおける低登録傾向や、AQにおけるコミュニケーション、想像力、注意の切り替え領域のASD特性がかかっている可能性が示唆された。研究3において、発話理解の成績をASD群と非ASD群で比較した。また、発話の主旨と関連する単語と関連しない単語のどちらに注意を向ける傾向があるかを、ASD群と非ASD群で比較した。さらに、発話理解の成績、単語に注意を向ける傾向とAQ・AASP得点との関連を調べた。その結果、ASD群は非ASD群に比べ、発話の主旨と関連する単語に注意を向ける傾向があることが示された。また、発話理解に困難を示す傾向とAASPにおける低登録傾向が関連している可能性が示唆された。

以上のように、本研究の結果、ASDにおける感覚処理傾向やASD特性と、発話聴き取りにおける物理的情報の知覚や発話認知・理解との間に関連があることが示唆された。